



特別  
~5  
1534  
11



嵐山集卷第十三

冬部

雪

あまのの細のや地やる併

まじくちひいふかめくあり

ひくふらふみ所らんえんかゆ

山後肉のほひよりたまたま

葛野とわぢらとて高見の山

まよふらとてぬとるやほり



利  
1534  
卷 11



鹿山集卷才十三

冬部

書

あゝ山の神のな地や雪佛  
さじくちひよかあさり  
わくろふ母以流く人そそりゆ  
史幾肉の伴ひをりたまや雪  
鳥驚とわぢぢらるゝ雪其あ  
夜よろろとあゝぬを雪や孫の

雪あんなにたなれんこむ白瓶  
 餅雪ふらふこと付ら本履水  
 土くれの雪道くらり鳩の杖  
 海まうぶあふあふやうのき綿  
 雪ふあふむし折やうあうう綿木  
 踏ちう流人のいひんよまうう雪  
 流ましくとよふうあふあんの粉雪  
 面白き気やまううあう折の雪

うき木もや花咲実のら雪  
 綿木針と包ぶのゆまのまう  
 長孫も目さけてとらる雪は  
 山姥の餅たされや木あきの雪  
 山窓よりうらる雪や清子  
 餅雪のうらる雪ふ出よ目の嵐  
 たうう入折るう  
 佐保路なるこひう雪やう

繁をさくして餅雪うらつ栲木  
 餅雪や木の葉も包む  
 あり雪と京州ありと刀も  
 為雪の銀や地も鞠も山  
 わた雪の白葉や山と坪の  
 ありふかの山のわさよの雪若  
 藪と川雪の垣をあらふ小付外  
 為雪の山眉作りけきやう外

五佐踏を皆あつらひ此のゆき  
 浮く雪やあつらひあせうの餅  
 あり雪や男松女松たりあり  
 藤の葉と風も吹すけ雪あり  
 雪乃花を今朝の白ふや香野  
 枝母葉あり雪はわらうも白涼  
 あり雪の栲木のおもや餅を  
 非想の葉を今朝の雪

丸山の雪の白くみの鏡の形  
 一よりいふまゝもや波さぬ雪女  
 ちり雪も松るりとあつじや  
 山はれわくちの白くみさるる雪  
 錦く似くはついでに雪のぬ  
 ちる雪の髪らと心珠のつら  
 あく雪の源氏のくさつ八橋山  
 冬道や足しつらつらつらつら

雪竹とさるるまことさるる雪  
 富士の餅雪うつくさる糸外  
 富士や雪のまじりて似てひきの  
 姫松の白くみさるるわねん  
 わまきりて流るる雪  
 杉州や雪の白くみさるる松の雪  
 月くさるるわんらまや松の雪  
 弁舌とさるる雪のさるる

うき雪の雪舟の舟はあまのついで  
西白やうき雪の舟はあまのついで

はじ雪をさかすこれこそおき山

雪の報社送のひととみ

舟航やうき雪の舟はあまのついで

木舟舟の舟はあまのついで

む孫綿の舟はあまのついで

うき雪の舟はあまのついで

山白の雪舟の舟はあまのついで

大舟舟の舟はあまのついで

雪舟の舟はあまのついで

舟舟の舟はあまのついで

雪舟の舟はあまのついで

舟舟の舟はあまのついで

舟舟の舟はあまのついで

舟舟の舟はあまのついで

うらうら白蛇なす 巾さ女  
 雪積ら本をそあはの八もよ  
 笨垣の雪や其まうたな  
 幾年をまこしうり袖の雪女  
 枝を葉も何そあはの雪女  
 淡雪や流きてまひくは  
 二日うらうらひう雪やうら  
 日中や雪のわらぬ唐の土

うらうら白蛇なす 巾さ女  
 雪積ら本をそあはの八もよ  
 笨垣の雪や其まうたな  
 幾年をまこしうり袖の雪女  
 枝を葉も何そあはの雪女  
 淡雪や流きてまひくは  
 二日うらうらひう雪やうら  
 日中や雪のわらぬ唐の土



冬来ても粉雪とまふと松

雪綿のつらつら竹やはり竿

なまめとら目もつくけく雪の松

水山々只雪花のうら野水

白雪のつらつら松乃豆枝家

餅雪れつらつ成木家

矢の折へとも雪は白雲

雪花も木の緑から常外

風の勢をとりせらる物や松の雪

下これ足をとをぬもや雪は如

雪水折なり楊からり川をさ

鳴喚いん時のうり物雪礫

しつ折へともひら雪れをりや

苔の上も積まらる雪や庭綿

目の紗やゆめお目の雪女

雪色いや女姿と三輪の山

あまうくしつとゆとくし女の雪女  
玉地うく冬深雪るこ國の  
柳の本母落つて雪や御去水  
詩作つそかろや東坡の行の  
是母落くくひせとちるこ雪  
くく雪の二月らと雪も志し  
雪を結くこ年とあん君臣の  
大雪や天下一すみの花

良庄  
多勝  
保友  
和  
一  
日

雪の松枝む子年と雪の字り  
くさくさうらうらうら松のゆき  
あまの串や白ふの染れ雪は花  
うしろくへりわりの雪の友  
大雪の目へ鐘ゆあつたうか  
落雪とくさくさや中いさり  
福中くさくさくさの起よ雪は折  
雪花や冬水窓の庭さく

元与  
日  
加友  
一元  
同  
良和  
長須  
利

月影のせむらもあらき雪や秋夜

兼山 兼山

ちと海に雪へ天津よとわわ

伊賀上野 伊賀上野

田中よりさきゆく雪やう孫嫌

姫宮 姫宮

さんんのまわふ山やつま雪

友任 友任

くちあつて能借とらわ雪舟

兼貴 兼貴

雪道いふあらなるぬ約りぬ

兼永 兼永

くまやけえそよりあな念ふき

不板三河 不板三河

わきやうえん惟子雪と比良の

純別 純別

筒巾花といくら心を竹の雪

兼別 兼別

横波せもわへ雪ありき朝分

兼任 兼任

まふ程をひくくわ雪は花留

瑞任 瑞任

急よりまふあ候のうと比松の雪

兼永 兼永

雪まの之様をさきわら綿なりし

高次 高次

いさみの雪や幣帛を向山

友勝 友勝

兼永 兼永

兼永 兼永

東寺へ行くつらむね糸井と物  
志をふむや白くするとも今朝雪  
花咲ぬ木や能くかき雪は枝  
少りきころひびく雪やゆふ  
雪花を雪のふ木の花は  
深敷くましくちよ雪は花は  
有馬山つらむ雪や湯惟子  
かみんわのすち宿めく

尾列久松屋  
政之

友  
右時

津回舟利  
油右

華公泰十守  
忠昌

之盛  
貞則

伊人  
後貞

かみん夏の虫の火より雪は宿  
枝多りく雪の花も池の松  
雪と花といふを雪としあは  
雪ちりて雪糸の竹や雪は  
馬の沼や木し油の枝の雪は  
誰を踏目らちりくや雪は花  
重なるもや枝のけり雪は竹  
人か雪と雪へ竹より

月  
梅盛

竹山  
定通

苗衣  
宗油

宗久  
富好

別  
忠之

別  
正忠

尾列  
貞則

三十一

芭蕉美の雪ハ志此の麻

在信度墨

勢の海ウリと人ても雪此山

曰

いせ山雪ハウキウキもりあひ

政吹

物雪や菊より後のこみ昌

道長

今白入と志のウリと人ても

利政

おふりく虫ハウキウキ雪のこ

保入

ゆく孫凡のウリと人ても此粉雪

季貞

雪落々ウリと人てもと夫氣亦

政俊

雪よれの作ハ白衣此少せか

正俊

枯木まて花作をウリと人ても

方淑

園中ちり雪や月夜のウリと人ても

重次

ウリと人ても起くウリと人ても

吉治

王あてて海雪の道や玉が下

重佳

雪ちりまて人てもと志此の利性

宗保

高ハ是雪并くわともや河はり

廣徳

大井川ウリと人てもと志此の雪は

不存

一海らん猫まゝ雪の白

三十一

あつらふともや乞ハ涼雪此花車

雪花や乞るん芳野の山極

よの文此乃めや雪也無文書

神ぬまそ惟子雪とあかりも

雪花を乞つら一の刀もその式

月光のちり下つとぬを此雪

勝尾寺ゆき

中川

多連

大坂井上

正知

月

夜より平吉

明高

末任基三

重吉

教安

正儀

吉田

自任

月教母雪のあらまや勝尾

音

正友

字わらもとや弁の中山もこの

寄七三

十八の公乃ちりまや松の雪

将基

雪藻此もこの酒もや壺此肉

伊大井公

白酒のほかののりちり藻の雪

同

雪の綿つじ庭三把志つ枝

平田

月

積年山くくふや雪の友

原田

良次

雪ちんこもさこりも色るる

目黒

程勝

雪さ日やしほさくすしゆの

雪ふらぬくくる子やたのり

雪母日れさ次差松のえりり

寶寺の杉りや雪母かられさ

雪花を始くむくく水枝ふ

卯の花乃まのひさる雪此處

元はくく冬木此母母こ雪ふ

為雪やそらすんたけさゆふ

高敷を雪流すけの根葉す

片思をたつまうくさのゆいま

田子よりうりりけは雪此處

美く躍き帷子雪と村産

雪のうられにむえぬさとも

雪ふらぬやと美帷子雪もさ

雪ふらぬのやあらさるり出立松

雪ふらぬ志望の在家や源

雪さ日やしほさくすしゆの

雪ふらぬくくる子やたのり

雪母日れさ次差松のえりり

寶寺の杉りや雪母かられさ

雪花を始くむくく水枝ふ

卯の花乃まのひさる雪此處

元はくく冬木此母母こ雪ふ

為雪やそらすんたけさゆふ

高敷を雪流すけの根葉す

片思をたつまうくさのゆいま

田子よりうりりけは雪此處

美く躍き帷子雪と村産

雪のうられにむえぬさとも

雪ふらぬやと美帷子雪もさ

雪ふらぬのやあらさるり出立松

雪ふらぬ志望の在家や源

雪ふらぬ志望の在家や源

雪ふらぬ志望の在家や源

きりよの雪やさきうらけり  
降雪や天女花咲地女身事

法園傳燈  
主紀

謡曲

竹の雪よりぬい風のまき子か

新所  
正勝

し此字より此竹もや雪に此字

谷  
玄樞

年とさちやぶい鏡玉の夜此雪

鏡玉  
重以

雪此竹絲より起り教と云

去後松  
玄殊

款のうらもけくきさくさ外

去後松  
光与

餅雪

餅雪と包ととととととと

去中松  
勝重

遠若雪のむとと

片桐  
良保

餅雪よりや中記のよふ外

去後松

きり雪母よりあけし進るよと

去後松  
安の

餅雪ふゆくととととととと

去後松  
可成

若ぬめく雪と

伊

餅雪や目女一の若ぬめんこ

伊  
位元



餅雪やゆく歌平大原野  
餅雪ハソの祝ハの娘小妻

雪女

高き山へ君のそとふ雪と  
積ふら水もわきん雪女  
雪女月の夜もわたりお山  
雪女ええやとらせらる靴綿  
ゆり子そわしきとわらわ雪女

琴  
清字  
良  
母

雪  
成  
平川

一井  
成  
成

成  
成  
成

成  
成  
成

成  
成  
成

雪女の化生道雲の歩面鏡

ゆりの子と海とわらわ雪女

目かたぬいゆりの鬼の雪女

夜子の森やうり神の雪とん

雪女とそ世女と少くはゆきと女

ひまの川のあわのこことらわ雪女

軒の素やゆりこのよのゆきと女

大森女ゆりてとけらわ雪と女

雪女  
成  
成

成  
成  
成

成  
成  
成

成  
成  
成

成  
成  
成

成  
成  
成

成  
成  
成

成  
成  
成

成  
成  
成

成  
成  
成

雪のりも流やこころ雪とんを  
天女のとくも女とく次ゆと女  
とくのとく雪女りやあつとつと  
女とるて雪や梅本増いあ  
あつ雪の女流や梅子とつ

雪佛

水部や多波乃佛とて雪佛  
ふじの神と花水とて雪佛

お佛おはくきさるあつとつと  
お佛おはくきさるあつとつと  
お佛おはくきさるあつとつと  
お佛おはくきさるあつとつと  
お佛おはくきさるあつとつと  
お佛おはくきさるあつとつと  
お佛おはくきさるあつとつと  
お佛おはくきさるあつとつと  
お佛おはくきさるあつとつと  
お佛おはくきさるあつとつと

中内御女

貞正

名

久保

道長

新河

貞成

方成

名

梅盛

未得

御中

保成

母河

貞次

江戸

舎成

名

友成

名

貞三

中内御女

一敬

名

貞好

中内御女

正成

雪佛色三人病のころや

月

萬物と一狎母作き雪佛

英三

浮る川にびる佛もや雪かきけ

方成

清水や枯木花さく雪かきけ

舟易

あをを冬そほく念仏の雪佛

正安

石佛坐禪のかもらうと雪

乃力

雪山の童子やお母ゆき佛

門

作る福しめをこの火や雪佛

法海

七の花

美原母治やうすじつの花

政次

あかしの海母塩をうもらわ六の花

道長

はじと書紙名らんりよ六花

利実

六の花わきそ積家へ六花

右内

三美山や三國母かうん六の花

久知

入る此はさうの母ちらわ六花

左内

じつこの花れきりや十二月

右内

霜天舟三の雪の流の六の花

新巻六并

枝のさわく生さう六乃るか

宝珠

冬此季ふらわめ善の六花

雪の跡に長  
乃伝

唱ふ字や六の花もろ七田忌

乃伝

海天やあふ心時ふも六の花

良直

海天宗の奇めく

高田舎本家  
頃

少る奇やるまめもい梅の六花

名松山

保太

弟のら由去年と心初ても六の

保太

林麻

りらわわらうくつらもの六乃花

友

右時

つらもまも六の花形やうり歌

良徳

るわあふぬ和琴此糸の六花

知是

とせとあまめうらせくさうも

長次郎

あまをんを折の本れりん歌の

月

よらあめこのうらせくさうも

月

餅雪やあふぬこのらんさじ

月

雪うららひあめせもわれ松ひみ

こ

あめ雪れ成を遠行そ花の親

雪なげや中よるをきぬあに旅

流らりきく水ぬるかりり雪佛

尚葉舎の伊くくきるくふ雪山

日本國と若野とるすや雪の

松浦舟舟少らつて雪も流る

餅雪とくもんとくもるき冬木

とらりていんを雪りりりり

柳極竹一舟を雪もあふ

雪霜のらりやんをらりあふ

雪ゆきく雪山始や秋うら

雪舟初居花身とあふ雪の海

雪舟しそや雪のうらりりりり

あき雪お雪あつる方や雪地獄

松笠を雪もあつる雪のいん

あつる雪のあつる雪のいん

雪をねく天ううかさいやい女家  
 雪女はまらうのこの一は比花  
 母花めとけらりしてや雪女  
 あり花うよあうじと然の雪女  
 雪地さく若めうらうや雪女  
 わの雪うさううめ花のうけが  
 町の雪うまなれまの人の雪  
 じりおとせとあうみ代わね  
 の雪

海をくいのまもくやうらゆま

西の本新奇唯如上人夫

治ふを

御門弘あうういそらんゆいん  
 武彦野をままじゆるまを  
 のうまわめあのかたう好く雪佛  
 あうらわら花を油との雪女ん  
 雪をいねと下折をば本は雪

富士山お庭の雪ふりりりり  
 根おけりり雪や来まの枝の花  
 雪おのけりりいりばと教くは  
 年つひやうと神妻まは雪  
 雪おれりりりりりり枯木お  
 周牆の侍元のいりおこか  
 つもや奥りれ舎お  
 まつりりりりりり雪おまはれ松

年家武志おまはりりりりりり  
 序地毎おまはりりりりりり  
 二条ここむりりりりりり  
 お松おけりりりりりりりりりり  
 雪おのけりりりりりりりりりり  
 山おまはりりりりりりりりりり  
 山姫の初新おけりりりりりり  
 大雪おまはりりりりりりりりりり

雪

此頃の人と云ふも今報の  
寒

栲津吹田あく

風きりちうく志也成る頃  
吹く風は花のやまをさ  
寒く寒の身の海をさるる  
さくさくさくさくさくさく  
思部あく

寒く寒あつらうくさく  
大枝の松をさくさく  
冬さるる城はるあつら  
寒く寒くさくさくさく  
寒く寒くさくさくさく  
寒く寒くさくさくさく  
海老のあつら身はさくさく

舟橋町ら  
送家如見  
舟橋あつら  
心次



安楽なるお僧の頼中冬は

友我

寒さねむくまゝくさるる

難波の御守の御  
政次

空ともかく命あるまじき

揚州の御守の御  
七葉重記

しらまらばくさくさ

長任  
宗原

あはれなきまの寒さ

長任佛光寺  
兼元勝

流るるまはるるや

冬  
冬

まよふ事さし

長頭北

あはれんもくさくさ

川

下へるるぬく

川

埋火

あはれ火さく

ふもくさくさ

料のさきん

火さく

ゆりつ火さく

火あはれ

長者もや多きく人土池田炭

かうろ孫の伊ちりれうらや物炭

埋火母あうらやゆあましあ外

あつと移るも肌いゆらとあ火桶

室やととるばととこのむと

釜あけて火母あていあもやゆら

せうあうらや焼の火桶のよたら

冬いるうとてうらあまう焼のたうら

季吟

埋火もかつあこのむ物炭

焼口の釜もとるわうらと炭のせう

釜もと炭又やと釜此炭の湯か

車切あせよ燭燈の小野此炭

せうと焼のうらゆらと火桶

足もりよするわとい西のせと

罪もくしてわとあ火もらと

行ふあつとあうらと舟のせと

中野川

貞直

奥のやあ

友三

友四

友宣

友五

友行

友六

友安

友七

友信

白炭や黒炭をそのつらふ

月

人を是とわくものなるもたふ

善

埋火のめさつとけわやま毛猫

月

伊ろつとめやちとさ火行い

時正

炭そりとりんでせつるやま

政泰

そま炭の多肌をばさる

良勝

遊善

良

多えりともみ

色

あとい焼といくこり火桶

重以

火の地まそん

正勝

枚考

茶のうくも

良保

う地のころ

宗清

室多

宗清

をのり

定昌

白炭のめら

元信

純別和

市兼

尾外

多房

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

三の

あら八夜並ハ流ハ炭火水

良

獨ラりあら火燧や三子

貞利

とら川の急と母ちいさ

猫の福とらと人の子志

燈と母のゆふとみく

新とせとせとゆつとこつとの

出の中母是の火瓶元

長つとと炭と薪の火と

友右

貞好

暖火のたは極とれやと

川とせとくきとひとあつと

灰と人すらとわとけと

木と炭と成と二と炭と

まらみとつと内と入と

白炭とやととと福と

牛とあつとととととと

橋山

保友

井上

西

祐

宗保

貞

平柳

貞

江

貞

江

貞

江

貞

孫らもも中ねの老の秘蔵式  
湯多火乃あけく炭や無瓶  
わすらるるも同じきかこ炭大桶  
各のよの中せつらもわおきあ  
ね奇おやとるけともいひらり  
くまいししとらりもさるる  
夏あねも無心とつらり  
おのみの炭車もさるる

丹  
夏秋

冊  
安部

長瀬

月

と

と

と

と

炭火あけく薪よまのせ夏の  
切これと出ても智恵も  
炭より丸なるんを生  
池田炭いけとあくはあ  
わの鬼のる焼くす

と

と

と

と

と

富士の麓より火電の煙を  
見れば  
火電の煙を  
見れば  
火電の煙を  
見れば  
火電の煙を  
見れば

安明  
正長  
政信  
善次

火電の煙を  
見れば  
火電の煙を  
見れば

火電の煙を  
見れば  
火電の煙を  
見れば

る網をすくふにや

五右衛門

園判

水鳥

あなは夜舟あはくもさくさく  
せりかたゆくと驚くもやうな  
誰とあつたあつたよんあつた  
長原のうきうきもあつたあつた  
流路のうきうきもあつたあつた  
殺生と思ふうきうきもあつたあつた

海をわたりちりちり此は秋  
とくもあつたあつたあつたあつた  
わが中にあつたあつたあつたあつた  
せいのふたはちりちりあつたあつた  
あなは夜舟あはくもさくさく  
あなは夜舟あはくもさくさく  
あなは夜舟あはくもさくさく  
あなは夜舟あはくもさくさく  
あなは夜舟あはくもさくさく  
あなは夜舟あはくもさくさく

七十八

浪連つらてそふなをむくふな  
水かきくくく碎くちりちりあ  
波くくく基をもくくく人浪子鳥  
浪風くくく中よしな子鳥  
九百九十九時をもくくく子鳥  
是とらりな浪くくく鬼家子鳥  
同くくくふ時くくくくく子鳥  
白鷺とたつ子鳥乃くくく鳩水

水鳥のくくく時着やどのり床  
なをたさそめく浪くくく此拍  
和歌の浦くくくくく浪のくくく  
舟楫くくくくく所生浪子鳥水  
あし浪もくくくくく難の浪子鳥  
海くくくくくくく八丈の浪子鳥  
波のくくくくくくく横くくく浪水  
くくくくくくくくく浪水

那山 成宗  
聖次 永吉  
林 久勝  
佛師 正勝  
岸 山岡  
留 山岡  
岸 山岡  
了寺 久吉



波のうらまをさうらうに濁らさる

六九

信

政信

琴の濁り友らさるるをさるるの

信

友之

一匹のふも海風の濁りさるる

信

友之

双葉の曇りもさるるの浦さるる

信

友之

叶んともふれもた濁りさるる

信

友之

あまのさうらうもさるる出波さるる

信

友之

さきさきさるるれむさるるの浪さるる

信

友之

うらうらまをさるるのさるるのさるる

信

友之

まらまらちもさるるさるるさるる

信

酒後の船初めさるるさるる

酒後の船初めさるるさるる

増えもさるるさるる酒後の船初め

増えもさるるさるる酒後の船初め

増えもさるるさるる酒後の船初め

増えもさるるさるる酒後の船初め

増えもさるるさるる酒後の船初め

信

友之

友之

友之

友之

信

信

信

信

信

増えも

信

友之

友之

友之

友之

友之

かの野の脚をよめとて  
 足揃ひのしむるも  
 指舟よとてあつて  
 昔よりつとめを  
 種を江戸月やじ  
 河き中せつらつら  
 短きとれはつら  
 いまらの鴨も波も

系 元新  
竹内 一系  
坊 舟の  
是 正知  
松蔭 一治  
染 一系  
了事 一系  
長 夕暮  
長 正知

生かす鴨の毛も  
 羽をよめとて  
 鴨の毛もよめとて  
 空よりとてあつて

鳥の 梅威  
徳 友之  
妻 保友  
妻 寸川

徳化湯也

村もよめとて  
 海もよめとて  
 かの野の脚も

系 友義  
系 未取  
 月

海原やそとく山小鶴乃ら多分

高

月

鴨もそつと田露さつりはあ

積勝

水もさつとあゆみのあゆみのあ

之巻

あつとあつとあつとあつとあ

留

春巻

池やあつとあつとあつとあ

中流

一角

こゝろさつとあつとあつとあ

留

貞宣

那波のあつとあつとあつとあ

伝安

鴨のあつとあつとあつとあ

未時

鴨のあつとあつとあつとあ

鴨

一宮

鴨のあつとあつとあつとあ

鴨

正安

鴨のあつとあつとあつとあ

鴨

久壽

鴨のあつとあつとあつとあ

鴨

不存

鴨のあつとあつとあつとあ

鴨

玄徳

鴨のあつとあつとあつとあ

鴨

高房

若名とつとあつとあ

若名とつとあつとあ

系

友我

水中の鳥の鳴きの音の響き 鳥

わらわの音の響きもさきも遠く 鳥

鴨の音の響きもさきも遠く 鳥

と鳴きもさきも遠く 鳥

鴛鴦の音の響きもさきも遠く 鳥

あひくもさきも遠く 鳥

我もあひくもさきも遠く 鳥

半家武夫の音の響きもさきも遠く 鳥

風中鈴の音の響きもさきも遠く 鳥

此の音の響きもさきも遠く 鳥

鴨の音の響きもさきも遠く 鳥

鴨の音の響きもさきも遠く 鳥

子も此の音の響きもさきも遠く 鳥

鳥の音 鳥

鳥の音の響きもさきも遠く 鳥

鳥の音の響きもさきも遠く 鳥

中鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

江村 砂や雲をくもるの

御時七之ききぬしらの紫

鳥 付将

驚らるも食ひの腹はあ

らしういとのしらの様

銅垂くをたたりし

大なるのゆきをくもる

大なるのくもるをくもる

季

驚らるも食ひの腹はあ

人のきふすつらたあつた

世のきふすつらたあつた

きふすつら

あつたあつたあつたあつた

寂滅の鐘もあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

書

浦

矢田

高

貞利

貞利

貞利

貞利

貞利

貞利

貞利

廿四



神業新由のほせて神やまの  
 浪の敷ふひかかろくつ子源の  
 浮城ふたつあう一海神玉  
 のくらの勢も海子ののりか  
 ちもあつちも神代もく神  
 さんかろくあつちもく神  
 久のくろよ射もかろく海  
 ころもあつちもく神

皇 位 正 武 正 武 正 武 正 武 正 武  
 正 武 正 武 正 武 正 武 正 武 正 武

神やまのほせて神やまの  
 浪の敷ふひかかろくつ子源の  
 浮城ふたつあう一海神玉  
 のくらの勢も海子ののりか  
 ちもあつちも神代もく神  
 さんかろくあつちもく神  
 久のくろよ射もかろく海  
 ころもあつちもく神

皇 位 正 武 正 武 正 武 正 武 正 武  
 正 武 正 武 正 武 正 武 正 武 正 武

神業新由のほせて神やまの  
 浪の敷ふひかかろくつ子源の  
 浮城ふたつあう一海神玉  
 のくらの勢も海子ののりか  
 ちもあつちも神代もく神  
 さんかろくあつちもく神  
 久のくろよ射もかろく海  
 ころもあつちもく神

皇 位 正 武 正 武 正 武 正 武 正 武  
 正 武 正 武 正 武 正 武 正 武 正 武

ゆき... 備  
ゆき... 政信  
ゆき... 良和  
ゆき... 長勝  
ゆき... 長龍  
月

節分

節分の様子を記す  
鬼は... 小槌  
節分... 松  
節分... 餅  
節分... 糰子  
節分... 萩  
節分... 萩





牛乳の大豆とあててふまは

極片

圓片

節分の大豆とあててゆ

蓄

虫の

節分や井筒の中も

蓄

友を

左敷研ゆへく大豆とあ

くは

左敷とらや入相子うら

蓄

宗勢

節分はあとの津波の鬼

蓄

毎夜

鬼やうゆへくはつち

蓄

定直

鬼のうらとん乃あも地

中川

直徳

そはあつていりてあま

蓄

元晴

はくもやうくはつち

蓄

定直

年のひとも子解大豆

蓄

長飛

ゆへくあつていりてあ

蓄

長飛

東門の夜

ゆへくあつていりてあ

蓄

長飛

銀座めく

節介のまね板ちんあひん  
年用云々

年乃ららぬゆきまじり

年乃のちかりんらるる

年乃云々

年乃云々

年乃云々

わこたのまきもろく

自乃年の内かまら

けり日

まきもろく

難冬

あひん

すららわら

難冬

難冬

池田

一室

難冬

約

くはらひくおぢみまの磨か  
わつりつひ目くしきりさるい  
く家風お念と守方なぐ水  
いづく様と腹鼓らるんが  
かゝるはしきとらつちつ  
さゆらおやうら十指れと念  
ちらわらうかゝると美は湯系  
おしとるくしてと持り

おとら様も服もあゝらうか  
さしきもあゝらうか  
お墨らみえとくしと山刀  
おさしひみえとくしと山刀  
菓の中はとつふまおんつ  
お本おも後とまそやわら花  
さしきのおはつ水とあまの星  
おとら人とながらりゆ

杖中  
尾崎  
自  
方房  
長也  
吉乃  
春泉

三十一  
四十一

新約と新とよみくらむれ

も教のせらうとらけりぬ

その強心じと町んすりわんか

足むえりあつかし世をこれひら

冬れえりあつとせむらりす

ちとやうつとせむらりす

秋らとせむらりす

約らとせむらりす

汗桐

厚友

外國寺

政次

月

長官

未得

布子紙子綿子もそのま

針織天着のりもそのま

巾着地もそのま

短袴織りのもそのま

履とほくしもそのま

汗肉もそのま

費りもそのま

あいの福も二たの本海費人

池田

橋本

島

島

善

信

角

貞房

信

政信

名

政信

くんがを程録りし殿つ

貞

多那のふ方も室若朝高

好永

山つおのそ

是のむえんくひやき

易

曆考やたはふと大経脚

政信

ちきう菜や好梅香松粉時

山

そくあそくすあ粉時

保成

後世のやけぬ志やそ松粉時

之

ひのふてめり録きし室は

室

懐妊やあくさんし十二月

梅

善月もはるやさんし十一月

貞

梅拂ふはらひくも十一月

政

十月十日日蓮

のりやまきひらんぬい梅

長

録りつらふはらぬ梅

冬勢云とつらふ

わんの中が都流くくす  
十二むくきりきりきり  
上戸家もりの餅はきり  
種代らまじり餅しきり

歳暮

くわくくくくくくくく  
くわくくくくくくくく  
くわくくくくくくくく  
くわくくくくくくくく

老と若くあまくくくく  
くわくくくくくくくく  
くわくくくくくくくく  
くわくくくくくくくく  
くわくくくくくくくく  
くわくくくくくくくく  
くわくくくくくくくく  
くわくくくくくくくく  
くわくくくくくくくく  
くわくくくくくくくく

出 重治  
斤 良保  
中 貞  
角 貞

年の先もくふの村邊とて

此矢取もく月とて十二米

あつからる年此矢取のあつ

実のくくつ書ふ

ゆき此はくくくくくく

年乃結の系書もく冬に終水

又くくく書もく酒くくく年とて

歳末也居穂田あともくく

先

月

書

書

書

書

書

書

秋てくくくく餅はくく年の先これ

せきくくくくくくくく年此書

毎此くくくくくくくく年の書

也新ゆぬくくくくくく年此書

天の中くくくくくくくく年の

年少くくくくくくくくくく

くくく年とくくくくくくく

あひはくくくくくくくくく

書

月

書

書

書

書

月

書

竹馬のついでにふりまわるとるる女が  
物

明曆二年丙申夷則吉祥日

寺町通圓福寺前町

秋田屋平左衛門板行

崑山集卷第十三 大尾





